2024.6.25 幼小中合同で研究集会をすること～６月の教育研究集会　その２～

令和３年度から、幼稚園と義務脅威育学校の合同で行っている教育研究集会。当日はもちろん育ちの連続性などいろいろ考えていく機会となったが、このように回を重ねてきて、子供たちの育ちをつなぐということはだけでなく、職員同士の連携というのも強くなってきていることを感じます。

コロナ禍で行った令和 3 年度の第 1 回目から数えて、今年で 4 回目。そこから義務教育学校で行われている実践研に参加したり、幼稚園公開ウィークに幼稚園に来てもらったりしてきました。春季、夏季と１年に２回行われる実践研では、幼稚園と義務（小中)、特別支援学校の職員が混合のグループになり、お互いの事例を聞き合います。実際にお互いの子供の姿を見る機会も重ねながら聞き合う機会があり、少しずつお互いを理解が深まっていっているように思えます。義務の前期、後期の先生方は幼稚園の遊びや探究の面白さ、良さについて、義務とのつながりを感じておられたり、1 年生の担任先生は、4 月始めの幼稚園での幼小接続会議の後に、「幼稚園での遊びを 1 年生になんとかつなげたいよね～」と幼稚園の環境をいろいろ見てくださったり。

後期の SY 先生は、「幼稚園の対象物に対し好きになったことを、後期課程ではその好きの解像度を上げていくんだと思う。」と言っていました。また、SK 先生は、コロナ禍の時からいろいろな方法で幼稚園に来てくれて、交流を仕掛けてくれていた先生で、ＳＳＴＡ（ソニー科学教育研究会）の福井支部の事務局をされていて、「11 月 2 日の幼稚園の幼児教育研究集会に小中学校のＳＳＴＡの先生を連れていきたいんだ」とおっしゃっていました。前期の K 先生は器械体操が専門。体育のＩ先生とともに、おととしの幼稚園の鉄棒遊びの事例に関心があり、今の 2 年生の子供たちの姿が、幼稚園での遊びからつながっていることを熱く語ってくださいました。技術の T 先生は授業で野菜作りをされていて、幼稚園の畑に興味をもち、「何かコラボができないかな」とおっしゃっていました。これらのことはほんの一部ですが、他にもいろいろな関わりがあります。

教育研究集会はまさに育ちを共に考えるいい機会。そして、それをきっかけに学年間での交流遊びや遊びと学習のコラボをしたり、新たなきっかけがうまれたりしていくのかもしれません。幼と義務の教員同士が共に協働しながら、12 年間の育ちを支える。それがなにげない日常の姿になる。そのためには、幼稚園も、受け身ではなく、無理ない範囲で、これからも義務にアプローチをしていけるといいなと考えています。